●人権教育推進会議情報誌●

# はじけるこころ

vol.3


人権の宝島　南小発……1

南小学校学校訪問……3

合同夏季一日研究会　人権・部落問題学習会分科会
「子どもの実態にあった人権教育カリキュラムづくり」……5

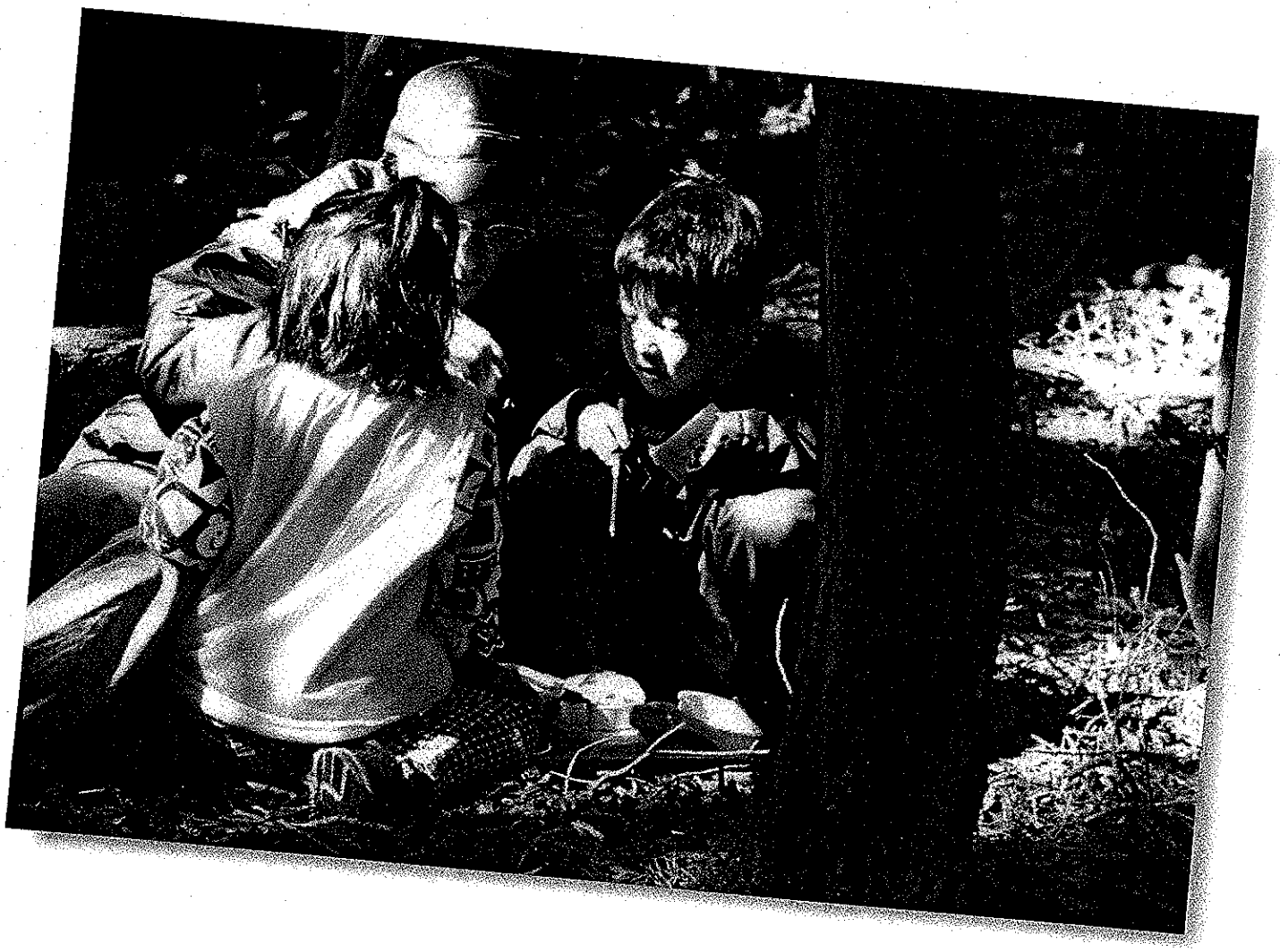
アンモナイトの化石のつぶやき、じんけんのこと　かわのひでただ……9

ゆうからきいて！(鼓吹)……11

こんなことあるよ(ひがし幼稚園・第六中学校合同運動会)…13

人権教育基本方針解説……14

げんげののべぇじ……15

みのおから世界へ！　人権文化の花束を！

# ！ つながりのわ

## 南小学校 すてきな出会いのある学校

其面市立南小学校

の連携でつくっていくことは不可欠であると考えています。学校での教育活動に保護者、地域の方に参画していただくことはもちろんですが、地域へ飛び出し、様々な形で子どもも教職員も地域の方と出会い、ともに活動することによってお互いの思いを受け止めあい、よりよいつながりへと発展させていきたいと考えています。

### ●6年生／『教科担任制』

担当のクラスだけでなく学年グループの教職員が授業を行うことで子ども集団や個の様子を早期に共通理解できたり、多角度から子どもの良い面をみつけられること、また、中学校へ進学にむけて校区間の段差を少しでも取り除けるようにと取り組んでいます。

算数IT授業

2組の担任が1組で授業

### ●4年生／『レッツ　ボランティア』

「ボランティアってなあに」ボランティアセンターの方から教わり、自分たちにできることを考え、活動しています。その時だけでなく、継続して取り組んでいきたいと考えています。

小さな子が募金してくれた

### ●5年生／『少人数指導』

学力保障として、１つのクラスに複数の教職員が入り、指導を行ったり、２つや３つに分割して指導をしたり、「きらきらタイム（個別対応学習）」を行ったりと授業の形態を工夫しながらより子どもたちがわかりやすい授業づくりにつとめています。

算数IT授業

分割授業

## 「地域に学ぶ」

総合学習――保育所の子どもたちとの交流「かわいいなあ」

地域の先輩とむかしあそび

平和登校（すいとんグループ）
保護者の方にも参加していただきました。

# おおきくなあれ

箕面市立

本校では、「自らが進んで考え、判断し、表現・行動していける子ども」、「未来を切り開いていける子ども」を目指し、『学力保障』『人権総合学習』『人間関係づくり』を大きな柱として、『地域とのつながり』を大切にしながら教育活動を行っています。子どもたちにとって学校・家庭・地域それぞれが生活の場であり、いずれの場であっても人権が守られ、あたたかく見守られる環境を三者

## ●1年生／『おはなしレストラン』

お話会「とんとんとん」さん(保護者OB)との授業づくり

小学校に入り、子どもたちの文字へのへの興味は大きいのですが、継続して本を読むことについては個人差が大きく、学年が上がるに連れ、差は広がっていきます。低学年の間に本を読んだり聞いたりする楽しさを充分味あわせることが大切だと考えています。

おはなしレストラン

## ●2年生／『手やゆびではなそう』

保護者や手話サークルの方々から、思いを伝えるのは言葉だけではないこと、伝えようとする心と受け止めようとする心が分かり合う「かけはし」になることを教わりました。

ゆび文字を教わったよ

## ●3年生／『地域へとびだそう！』

地域の先輩に出会うことにより昔の暮らしや人々の苦労、工夫を考えます。たくさんの出会いからつながりへ。

いこいの家でインタビュー

# 「地域とともに」

「さくらルームみなみ」（南小地域福祉活動拠点施設）で福祉会の方々からお話を聞かせていただきました。

地域の行事に参加。
「春のカーニバル」手作りおもちゃの店

地域運動会（グループ対抗リレー）
「しらゆきひめと7人のかわいいこびとと動物たち」

# 南小学校学校訪問

人権教育推進会議では、各学校の人権教育の取り組みを知ろうと学校訪問をしています。10月23日・25日に保護者対象に開催された南小学校の人権参観に参加しました。25日の授業終了後、人権教育推進会議に南小学校からも出席いただき、南小学校の人権教育について説明していただいたあと、委員と意見交換をしました。それぞれの委員の意見を紹介します。

## 子どもとしての問題意識を大切に

自発性を尊重したボランティア学習を組み立てることの難しさを感じました。

子どもたちが様々な人と出会い、交流する。また、地域の歴史や自然、さらに環境や平和、人権について学ぶ。そうした積み重ねを通して、各自が社会に対して何らかの問題意識を感じ、行動をおこす。これがボランティア学習の踏むべきプロセスではないでしょうか。問題意識の発掘に至るまでの過程に十分な時間をかけ、各自がそれをしっかり自覚して活動できるようにしたいものです。

おとな社会の様々なボランティア活動を知ることも必要だとは思います。でも、おとなの活動の模倣ではなく、子どもとしての問題意識に根ざす、等身大の活動をみつけてほしいと思います。活動を通じての仲間づくりや異種間の交流は、人権への視野をさらに広げてくれることと思います。　**服部ひとみ**

## 人権参観について

高学年の日に参加し、4年生と6年生の授業を参観しました。

6年生は「もしも私が、小学6年生の子どもをもつ親だったら…」というテーマで授業があり、テーマを聞いただけでとても興味深く、子どもの発言を聞いていても、楽しんでやっているのが感じられ、出されている文章（子どもたちがあらかじめ書いたもの）を読んでも考えさせられました。(2)あなたの子どもにやらせてあげようと思うことは何ですか。という質問に答えた中に次の文章がありました。「自分の将来の夢を大事にしてほしい、その将来の夢をめざして、今、できることを自由にやらせたい。」これを読んで感心してしまいました。その他の文章にも、今の子どもの想いや気持ちが表れていて、胸が詰まる思いや、思わずニヤリとしたり、今の子どもたちが置かれている状況を感じ複雑な気持ちになりました。

4年生は「レッツ・ボランティア」というテーマで、いろいろなグループに分かれて発表しているグループや少し消化不良のまま発表しているグループがありましたが、これを続けていくことに意味があるのではないかなと思いました。発表することに一生懸命になっているのではないかな、終わったらホッとしてしまうのでは、という気持ちになってしまいました。グループに分かれるまでにどれぐらいの時間をかけられたのかな、とも思いました。

**永田よう子**

## 人権参観

子どもたちはきっと"人権"について深く考えたことないのではないでしょうか。でも、授業の一つとして少しずつ考え、体験していくことで何か心に根付いてくれればと思います。

今回、第1日目は、4年生の授業を参観させていただきました。高学年の仲間入りをした4年生は、自分たちができるボランティアにはどんなものがあるか、手探りしているようでした。

お年寄りの方々に、好きなお菓子を聞いて手作りして食べてもらうというグループや古切手やベルマークを集めるので協力を呼びかけるグループ、小さい子どもたちとあそんであげたいというグループ。それぞれが、集まって意見をまとめての発表でした。大人の人に"してもらう"ことの多かった子どもたちが、自分たちが他の人に"してあげる"そして"喜んでもらう"ためにきっと何時間も話し合ってきたと思います。スムーズに決まらなかった時もあったでしょう。他の人の意見も聞いてお互いに納得して"まとめ"に入ったと思いますが、そんな話し合いの中で、お互いに"人権"を認め合っていくことも"人権"につながっていると思われます。大人の一人として、私たちも日々、ついつい自分や家族のことばかり考えていないか、改めて考えさせられました。

2日目は、2年生が手話を教えていただくということで、私も近くで教えていただきました。身振り手振りで相手に伝えるということも、日常少なからずあるのですが、手話の一つ一つに意味があり、それを教えていただくことで、とても身近で覚えやすいものなのだと感じました。また、大人より子どものほうが頭が柔らかいので、手話を覚えることを特別なこととするのではなく、小さい頃から少しずつ教わる機会が増えていけばよいと痛感しました。

今回、他の学年を時間の都合等で参観できなかったことは残念でした。学年ごとに、その年齢にあったとりくみをしていたと思いますので、続けることで毎年毎年"人権"を大切に思う心が育っていってくれることを望みます。

本当は、いちいち考えないですむ世の中になるの

が一番なのです。小さい頃、父が話してくれたことを今でも覚えています。「同和問題とか、やいやいいうのがおかしい。みんな仲良くしたらええんや」と。その通りなのです。すべては、人種も障害も男女も、何の壁もなく、"仲良く"。それがキーワードだと思っています。

**福島全子**

## 3年生の「どんな気持ち?」

相手の感情を理解する、ということは大人になってもずいぶんむずかしい。私たちが子どもの頃は、人の気持ちを思いやりましょう!と先生にかけ声で教えられた。でも、自分の感情をどう伝えるか、なんてことは教えてもらわなかった。というわけで、おもしろそうな3年生を参観。人間関係のつくっていきかたをこんな小さいときから学べるなんて、今の子はうらやましい。

イラストを活用して、それにあうキャッチコピーを考え、最近そんな気持ちになったことがあるか、出していくところはおもしろかった。ペアになってカードあわせをし、どんなときそんな気持ちになったかをシェアするところで、子どもたちはゲームの方に一生懸命になっているようだった。でも、こういう学習は楽しいと感じてくれれば、次にうまくつながると思う。新しいタイプの人権学習を参観させていただき、とても楽しかった。子どもがこういうことを学校で学んでくれれば、家族のほうも子どもにちゃんと向き合って、気持ちを伝え合う努力をせざるを得なくなってくる。大人にとっても必要な学習だと思った。

**人権教育推進会議委員　埋橋淑子**

©大阪府人権教育研究協議会

## 「同じだね!」「ちがうかな?」

他のクラス、学年も参観する予定をしていたが、最初、参観したクラスの授業内容、子どもの反応が興味深かったので、最後まで一つのクラスを参観した。今日のまとめは、「他の子どもも、自分と同じような感情や気持ちになる。」ということであった。このことも、大切な視点であるが、今後、「同じような場面に会った時でも、自分と違う感じ方や考え方が、あるんだな。」ということを気づく学習の場も、小学校の中で必要ではないかと思った。

**南橋正博**

人権教育推進会議は「学校の応援団になろう」としているが、どんなことを応援したらいいのか聞かせてほしいという委員の声に応えて、学校から次のような意見が出されました。

「それぞれの学校ではいろいろ考えながら人権教育をすすめているが、学校にかぎらずいろいろなところで人権教育がすすめられていると思うので、手持ちの情報を発信してほしい。」

「人権教育も、総合学習も実践を続けてきたので、人権教育カリキュラムはできている。しかし、活動は引き継がれるが、理念が引き継がれにくいという問題点がある。いろいろな角度からの意見をいただくことができたらよいと思う。」

「学校内でカリキュラムを考える限界がある。今回の学校訪問で、人権教育推進会議はいろいろな活動をしている人で構成されているということが分かったので、アドバイス（相談）を学校から求めたい。事務局から適切な人につないでほしい。」

人権教育推進会議としては、「違った立場で見るとよく見えることもあるので、会議のメンバーや、会議メンバーのネットワークを使ってもらえばいいのではないか。」「情報提供という意味で情報誌『はじけるこころ』でいい実践を紹介したい。」「これからもいろいろ学校の意見を聞いていきたい。」と考えています。

**10月23日**

| 学年 | 学習名 | 学習のねらい |
|---|---|---|
| 4年 | レッツ・ボランティア | ボランティアの活動をしている人たちと出会いながら調査し、自分たちにできることを見つけ、実践していきます。 |
| 5年 | 地球環境について考えよう | 地球環境という視点から、自分の生活に目を向け、教科の学習や環境NPOの方々との出会いの中で、わたしたち人類の課題について考えます。 |
| 6年 | もしも私が、小学6年生の子どもをもつ親だったら・・・。 | 親の立場に立って自分の生活について考えたり、友だちの意見を聞いたりすることを通して、より広い視点で自分の生き方について考えます。 |

**10月25日**

| 学年 | 学習名 | 学習のねらい |
|---|---|---|
| 1年 | 「みんなみんなだいすきだよ」いえのめいじんをさがそう | 家の仕事や得意なことを調べ、家の人のすばらしいところや家族の役割について考えます。 |
| 2年 | 手や指ではなそう | 手や指で歌うことにより、体で表現することの楽しさ、すばらしさにふれ、手話を身近なものに感じる機会とします。 |
| 3年 | どんな気持ち? | 人には、いろいろな感情があることを理解するとともに、自分や人の感情を受け止めることについて考えます。 |

箕面市人権教育研究会、箕面市教育研究会、箕面市在日外国人教育研究会が合同で「合同夏季一日研究会」を、8月2日に開催されました。今年は、人権教育推進会議が「合同夏季一日研究会」の人権・部落問題学習分科会の企画・運営を担当しました。人権教育の実践を学び合おうと、御所市立大正小学校・松原市立布忍（ぬのせ）小学校・箕面市立萱野小学校から実践を報告していただきました。

## 合同夏季一日研究会　人権・部落問題学習会分科会

# 「子どもの実態にあった人権教育カリキュラムづくり」

コーディネータ・大阪府教育センター人権教育グループ主任指導主事　齊藤政隆さん　箕面市立萱野小学校　森村康子さん、龍見敬明さん
松原市立布忍小学校　池上英明さん　御所市立大正小学校　萬田千恵さん、山本訓子さん、平野加奈さん

報告内容

### 萱野小学校

自分を出発点に、よりよい社会づくりに参加する子どもたちめざして

## 人権総合学習「ひとまちっく箕面新都心」

地域は出会いの「宝箱」。萱野小の校区は、古い歴史のあるまちと新しいまちが混在している。萱野小では、課題の大きい子どもを見つめることを基盤に据えて取り組んでいる。人権文化の拠点「らいとぴあ21」などの財産を生かした取り組みをすすめている。

人権総合学習のフィールドはまち。人権教育の4側面に照らして、「人権としての教育」「人権についての教育」「人権が大切にされた教育」「人権をめざす教育」を基本とし、取り組みのチェック項目にしている。

5年生の「ひとまちっく　箕面新都心」について報告する。

子どもたちと地域との出会いを大切にしながら、ぬくもりのあるまちを実感させたいと考えていた。保護者と地域の方とともにワークショップで計画をつくった。導入は、「ここはどこでしょうクイズ」地域のさまざまな場所の写真を示してクイズで興味をひきだした。その後、フィールドワークや聞き取りを行った。小テーマ選択では、生き物、環境、バリアフリー、まちづくり、広報活動など。それから3つの「つくろうプロジェクト」「調べようプロジェクト」「伝えよう・広げようプロジェクト」で活動した。「伝えよう・広げようプロジェクト」では、市広報誌「もみじだより」の原稿づくり、ビデオ番組作りなどをした。

人権課題との出会いということでは、目の不自由な方といっしょに新都心を歩き、新都心計画への提案をした。また、バリアフリー建築をめざす女性の大工さんとの出会いもあった。

### 布忍小学校

## 子どもの実態にあわせた人権教育カリキュラムづくり

被差別部落が校区にある。食肉産業が中心、非常にきびしい生活実態である。母子・父子家庭は生活に追われて親と子がゆっくり向き合う時間がとれない。しかし、本校の保護者は学校の教育に関して高い関心を持っている。

授業改革では「継承と発展」を言ってきた。継承することは、一人ひとりの課題を見つめること、自分の問題としてとらえること、人とのであいを大事にすること、集団づくり、なかまといっしょにすすめること。発展するこ

とは、多様な人権課題と出会うこと、選択や体験学習を大切にすること、聞き取りのネットワークを広げること、自分の気持ちを伝えるコミュニケーション力をつけること、情報格差をなくすこと。

5年生の人権教育カリキュラムでは、国際理解と自分史学習。特に自分史学習は大きな柱、ねらいは、自分がかけがえのない人間、保護者や友だちから大事にされているということを再確認すること。5年生は思春期の入り口、子どもは背伸びをしたり自分の気持ちをぶつける時期だからこそ、自分史学習を位置づけている。

国際理解は、外国の文化にふれることも大切。もう一つ、外国は別世界のことではなくて、いろんな国にたくましく生きている人がいることを伝えたい。「わくわくワールド」として、身の回りのものがどの国で作られているか近所の商店を廻って調べる。阪南大学の留学生や姉妹校ともつながりをもっている。もっと外国を知るには、外国の方から話を聞くことが必要。最近では料理やバンブーダンスをいっしょにするというような活動もしている。

2学期の自分史学習は、「自分の宝物をみつけたよ」というテーマで、まず先輩（卒業生）から話を聞く。いろんな方法で、一人ひとりと話込んで、生い立ちを振り返る。仲間の生い立ちを振り返るのを展開とよび、それをひな形にしながら考える。グループごとに自分の生い立ちを発表する。親が再婚した子が、「うれしかったのは、自分が語ったときに、みんなが一生懸命考えてくれたことだった。心に残った。」と言った。宝物の交流だ。グループから全体へひろげていく。写真も出しながら発表する。自分史学習は「輝くものは自分の中でみつけた……」という意味をもっている。自分史の全体学習は「1／2の成人式」と位置づけ、大切にしている。

## 大正小学校
## 人権総合学習「どっちがうまいでしょう2001」

奈良県葛城山の麓、『橋のない川』のモデルとなった被差別部落を含む。4割がムラの子、児童数は500人ちょっと。85年大正中学校が休校措置をとった時の中学生が親になり地域に戻ってきている。離婚なども多いし準要保護家庭も多い。

子どもたちはゆれていた。みんなで見ていこうと、97年から5・6年生で教科担任制にした。多くのおとなで見ていこうと、チームで見ていく授業スタイルを試してみた。99年から人権総合学習に取り組んできた。萱野小にも全教職員で見に行ったり、布忍小に研修に行ったりした。子どもたちの実態を見据えてやっていこうと、他校のいいところは吸収しながら自校にあった取り組みをすすめてきた。

昨年度の5年生は、がさついた落ち着きのない子どもたちだった。総合学習を3年生の頃から積み上げてきたので、調べ学習も学校図書館だけでなく公立図書館でも調べたり、インタビューをしたり電話したり、ネットで検索したりという力量は身につけていた。調べた内容を劇や紙芝居にしたり、より効果的に調べたことを伝える方法もいろいろやってきた。その他の教科でも、目新しいことに興味を持ち飛びつく反面、じっくり掘り下げたり研究したりするのは弱かった。

人権総合学習のテーマは、「どっちがうまいでしょう、ラーメン対チャーハン」。つかみをプレゼンで派手にやり、食べたい方に分かれる。それぞれの中でさらに種類の違う物に分かれる。「キムチを考える」「醤油を考える」「シーフード」を考えるグループに分かれた。地域の中華料理屋さんにゲストティーチャーに来てもらった。予選でチームの代表を選び、決勝戦は体育館で、ディベート形式で発表。3学期に自ら作り食べた。

### 討議より
### 部落問題学習
### ■部落問題学習をしなくっていいのではなく〈大正小〉

直接的に部落問題学習には入っていない。これまでは5年生は大正小校区の部落問題の取り組みをし、子どもたちに押しまくる展開をしてきた。どんないい材料でも子どもたちが見て食べたくないものではだめであって、まずは食べてみたいものをと（部落問題学習をしなくっていいのではなく、食べたくなるものに）、真っ向勝負を避けた。人権総合学習の中で「お家の人大好き」、「地域に飛び出せ」など3・4年生で部落問題のアプローチはやっているし、6年生では自分史もやっている。

人権総合学習の初年度は第1弾「お好み焼きとピザ」をやった。お好み焼き屋はムラにたくさんある、地域のおばちゃんに話を聞こうと、また宅配ピザが始まって単純に食べ物でと、始めた。第2弾はそのまま持ち上がった6年生の子どもたちから「ご飯対パン」でやろうと提案があり取り組みをすすめた。無理矢理、部落問題を入れなくてもいいのではと思っている、部落問題は他の教

科などでも入れられる、ちょっと逃げかもしれないが。

**■親や地域の人のことば、苦労を分かることから〈布忍小〉**

部落問題との出会いは、4年生から6年生で食肉産業に携わる人のことば、苦労、を伝えてもらい、他の仕事も大変だよとつなぐ。自分史学習では、おかあちゃんが学力で苦労したこととかを通して、部落差別が分からなくても、5年生でもその苦労が分かる。そして、6年生になり、歴史で習う。

**■地域には人権課題がある〈菅野小〉**

地域を歩くと人権課題はどこにでもある、それを見逃さないようにしている。まちづくり調べようチームでは、「らいとぴあ21」を拠点にしてまちづくりを積極的にすすめる活動をしている人から聞き取りをした。子どもからの質問に答えて、「おっちゃんは解放運動に出会ったから今の生き方ができるようになったんや。元気をもらったので、今もまちづくりの活動を自分のやりがいとしてる。」と話してくれた。聞いた子どもたちは、共有する場面で、他の子にもその話を伝えた。「らいとぴあ21」へは地区外の保護者もいっしょに行って同じ場面で同じ話を聞いた。部落問題学習を設定するが、その前にこのような出会いがあればいいと思っている。

**■「どっちの料理ショー」でいいのか〈会場から〉**

4月まで、神戸水平社発祥の地にある学校に勤務していた。人権総合学習をどうするか悩んだ。親からは「死なん子」にしてほしいという話が出た。やっぱりそういう学習を残していかないといけない。でも、地に足がついたことをしないといけないと思う。『橋のない川』のモデルになった地域で「どっちの料理ショー」でいいのか。差別をなくするためには、部落の子だけ頑張らないといけないのではなくて、それ以上に部落外の子ががんばらないといけないということにも気づいた。

**■教師根性とためらい、必死で考えて〈大正小〉**

またか?という地域の声。過去のことを聞き取ることからの展開やアプローチがあって、教師は部落の子に「部落の子はがんばれ」と言い過ぎていないかという意見があった。「そんなことより、勉強を教えてほしい」って。でも、部落差別を教えないと、突然突き詰められたときに、死んでしまっていいのか。この子に部落差別にあっても生きていく力をつけたいという教師根性とためらい、必死で考えていかないとあかん。完全に真っ向勝負を避けるのではなく、場面場面でいれたいと思ってる。

## 自分史学習

**■話してみようというきっかけを〈布忍小〉**

保護者は、親の会をつくり5年間話し合っている。経験者から話してもらって、また子育ての悩みを話したりして、これらがきっかけになって話してみようとなってくる。それでもだめなら他の保護者や教師から話す。子どもには、無理にしゃべることを求めはしない。みんなの前でなくても、ある特定の子の前でもいいからと場をつくることもある。せめて感想だけでも言う場をつくる。

**■今は、そのことにふれてほしくないこともある〈大正小〉**

産みの親に育てられていない子、両親がいない子もいて、今はそのことにふれてほしくないということもある。大切な問題だ。危険を背負って、それを子どもに課すのか。

**■一人ひとりの親の話をしっかり受けとめ、ゆっくりと〈布忍小〉**

子どもに何を話すか、親の中で葛藤がある。経験のある親から話してもらったり、いろいろしている。自分史学習をする以前には、親の生い立ちの学習をしていた時があった。子どもに話できないこともいっぱいある。自分史学習をするときには、相当足を運ぶことが大切。学校にとっては繰り返しであるが、一人ひとりの親にとっては、初めての経験だ。今の親（30代）も差別ではいろいろ苦労をしている。子どもに同じ思いをしてほしくないということがあるだろう。親の意識とつきあわせて、ゆっくりちょっとずつしていかないとだめ。

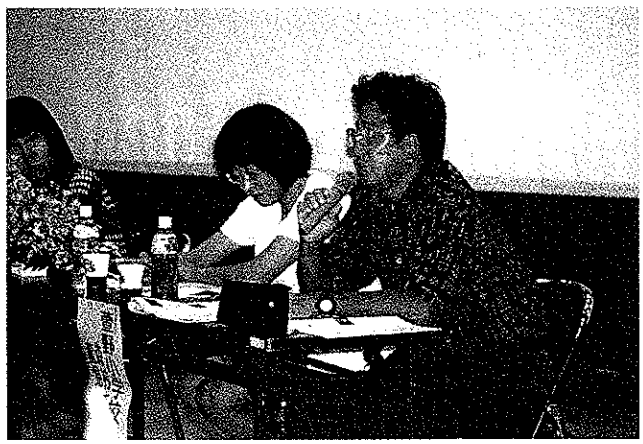
## まとめ

### 人権教育カリキュラムづくり〈コーディネータ・齊藤さん〉

**何を教えたいのか**

親や地域と出会って、その願いをどれだけ教師が受けとめて教材化して子ど

もに出していけるかということだと思う。直接的でなくてもいいと思う。「今日のホームルームのプリントとてもよかった。これを作った先生の願いや思いよく分かった。教材もいいし作った思いも分かったが、今日の授業では先生の熱意は伝わらなかった。」と高校生が感想文を書いた。教師が共通に考え受けとめないと、教材がよくても伝わらない。スキルという言葉をよく使うが、「スキルより大事なのはウイルだ」「そしてスキルもウイルだ」と。教師が何を教えたいのか、それに基づいて身近な題材をどう作り上げるか。真っ向勝負をするのか、しないのか、今がいいのか、ちょっと待った方がいいのか、子どもの実態にあわせて、考えた方がいい。



## 学校としてのカリキュラムづくりを

「個別課題への取り組みが少なくなってきて不安である。」と、森実さんが書いておられた。今、ストレートに部落問題学習を投げかけることがどうなのかという論議をして、学校としてカリキュラムづくりをしていくことが大切だと思う。

学校の中で最低のラインを共通にしないといけない。どんな力をつけてやりたいのか、学校全体で共通理解をする必要がある。その上で、どんなカリキュラム、教材ということになってくる。学校も忙しいだろうが、そこをやらないと次に行かない。子どもの実態も把握した上で、このことをやりきってほしい。

## アンケートより

○部落問題をどう教えるかということが、今日のポイントの一つになりました。これを地区を含む学校だけの課題とせず、少し一般化して考えていくことが、今後の新しい人権総合学習のあり方につながると思いますが、あと一歩深い議論にならなかったのが残念。継続したディスカッションを望みます。

○直球（真っ向勝負）かカーブかは難しい判断ですが、ここ数年直球を投げていなかったので自信はない。でも、少なくとも直球を選択肢としてもってカーブを投げるのか、直球勝負の意志力はあるのかということは考えなあかんと思います。直球の心地よさを久々に感じました。

○中学校でも人権学習をして生徒たちにうまく伝えられるかどうかと不安になることがあるのに、小学生が相手だとさらにわかりやすく工夫して伝えなければならないので大変だろうなあと思っていましたが、今日発表してくださった3校の先生方はとても上手に子どもたちが興味を持って取り組めるように趣向を凝らしていたので感心しました。年齢を問わず、自分を大切にすること、仲間を大切にすることの重要性はその段階でわかるように伝え続けていかなければならない。また、伝えていくことで必ず心に響いて何かが残るように思いました。

○どうして「人権教育」が、部落問題学習ＯＮＬＹという印象になってしまうのか、同和教育が人権教育と変わったことの意味を真正面から考えていかないといけないと思う。法切れのため名称が変わったととらえるのはまちがっていると思います。そういう側面もあるかとは思うけど、まともに人権教育をどうすすめていくか、幅も奥行きも広げて考えていく必要があると思います。

## 人権教育推進会議委員の意見

・テーマが漠然としていたので、テーマと発表内容があっていなかった。もっとテーマを絞った方が良かった。発表校が3つでは多く、発表の時間が長かったので、会場とのやりとりの時間が短かった、また会場からの意見もなかった。

・3校の実態がそれぞれ違い、ある学校の取り組みをそのまま他の学校にとりいれるということはできないが、それぞれの学校がその地域に応じた実践ができているという印象を持った。直球で部落問題をとらえることが難しいが、それぞれが違いながらも状況に応じてつくっていた。

・各学校の状態がよくわかった。率直に発表されており、自分もがんばろうと思った。

・それぞれ地域の状況がちがうが、地域に応じてつくられる、以前萱野小にいたが、そこで議論したことはよかった。萱野小は、布忍小のようにも大正小のようにもならない、それぞれの地域に応じてつくられる。部落問題学習＝人権学習ではないということを改めて振りかえることができた。コーディネーターには、自分の思いを語ろうとする気持ちもわかるが、府の今後の動きを言ってほしかった。

・あんな年齢の子どもにあんなことさせていいの？というような子どもの年齢の議論がなかった。子どもの成長過程に応じて、どんな取り組みが必要なのかというような議論ができればよかった。

# アンモナイトの化石のつぶやき、じんけんのこと……

かわのひでただ

わたしのこと
あなたのこと
みんなのこと

まちのこと
日本のこと
アジアのこと
世界のこと

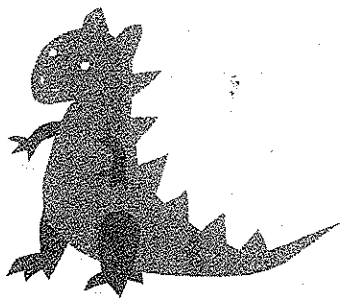
いままでのこと
いまのこと
これからのこと

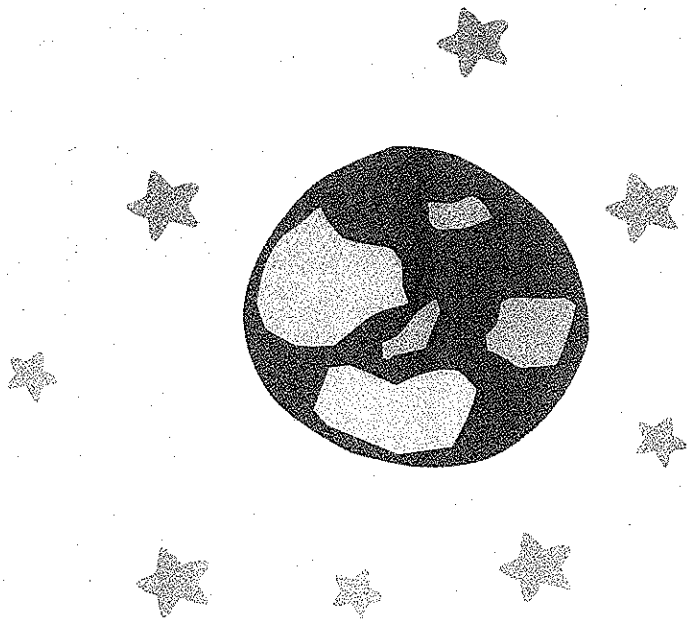
にんげんが　歩きだしたころからのこと
にんげんが　いっしょにくらしだしたころからのこと
にんげんが　あらそいだしたころからのこと
にんげんが　なかよしになろうとしたころからのこと

おひさまのように　あるもの
雨のように　大切なもの
風のように　どこにもあるもの
雲のように　ゆっくりと考えるもの
海のように　深くて　広いもの
山のように　高くて　けわしいもの

世界中のひとたちが　ひつようなだけ笑うためにあるもの
ひつようななみだを　よろこんでながすためにあるもの

くらくて　あかるく





ゆめと のぞみをともだちにして キラキラしつづけるもの

ひとりひとりの こころとからだにピッタリと くっついているもの
それがなければ こころとからだにならないもの
見えないけれど 見えるもの
かんじないけれど かんじるもの

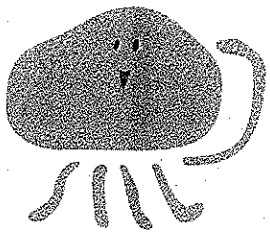
ひとりひとりの 足もとにあるもの
世界中の どこにでもあるもの
あなたや みんなのお母さん お父さんにも
そのお母さんの お母さん お父さんにも、
お父さんの お母さん お父さんにも
そのまた お母さん お父さん
そのまた・・・
そのまた・・・
ずぅーっとあるもの

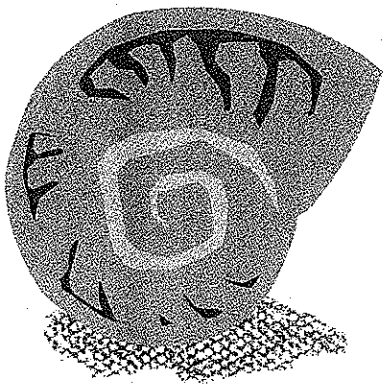
いろんなちがいがあっても いっしょのもの
それぞれは ケンカするけれど
けっして こわしてはならないもの
ぼうえんきょうにように とおくを見るもの
むしメガネのように とても近くを見るもの

こころの うごき
からだの あせ
自然の しずく

だから 地球のこと
だから あなたひとりのこと
だから ひとりひとり みんなのこと

にんげんが 地球にあらわれる
はるかな むかしより
アンモナイトの化石の、つぶやきが
風をつたって あなたの みみと 気持ちにとどきます





**みんなではなしあうヒント**

- ●アンモナイトの化石をしっていますか。
- ●じんけんのことをしっていますか。
- ●あなたは、じんけんって、どんなものだと思いますか。
- ●学校では、じんけんのことを、どんな時間に教わりましたか。
- ●なにがじんけんで、どうして大切にしなければならないのかを、先生やみんなと話し合いましょう。

# ゆっくりきいて！

**らいとぴあ21で活動している「北芝太鼓『鼓吹（こぶき）』」の練習へ11月20日にお伺いしました。20日（水）は、子どもの練習日、小学生10人、中学生2人が練習中で、2人の若者が熱心に指導をされていました。また、「鼓吹」の活動を支えていらっしゃる丸岡和之さんがじっとようすを見守っておられました。練習後、中学生の2人、若者2人と丸岡和之さんにお話をお聞きしました。**

――「鼓吹」の活動に参加するきっかけは？

○小学校の4年のときに、「鼓吹」のメンバーやった友だちに誘われた。

○わたしも4年からやってんねんけど、はじめみたとき、かっこええなあと思った。

○活動をはじめて3年目なんやけど、そんときのキャプテンをやってた人が、わかもんのチームをつくろうとしてて、誘われたんです。やってて「鼓色祭響（こしきさいきょう）」とかの公演にも出たり、いろんな舞台にも出て、かっこええなあと思ったから続けてる。それとわかもんは、子どもには負けたないと思てるし。

○はじめはお姉ちゃんがやってて、よばれて来るようになりました。舞台に立つんがおもろくて、楽しんでやってます。

――舞台は、年にどれくらいあるんですか？

○うーん、いっぱいあって数え切られへんわ。

○最近で言うと、香川県で本島（ほんじま）の「荊（いばら）」と共演しました（香川県人権フォーラム）。「鼓吹」が一番遠くに行ったんは、タイのバンコクで「第5回アジア子ども文化祭」のときやときいてます。「アジア子ども文化祭」は、マイペンライの主催でアジア各地で毎年開かれてます。タイに行った人からめっちゃ楽しかったと聞いたんで、わたしもチャンスがあったら絶対行きたい。

――一番印象に残っている舞台は？

○「滝鼓競響（ゆうこきょうきょう）」。ちょうど5周年記念で、メイプルホールでやった舞台が印象に残ってる。すっごくやってきて、いろんな曲も増えてきて、5年目をむかえた記念の公演やったから。5年間やってきたっていう想いもあったし、とても心に残ってます。

○メイプルで公演したときは友だちもいっぱい見に来てくれて、「よかったで」と言ってくれてとてもうれしかった。

――持ち曲は？

○今は12曲。太鼓奏者の時勝矢一路（じしょうやいちろ）さんに書き下ろしてもらった1曲からはじまって、今では12曲になってます。太鼓のパートとか締太鼓のパートとかパートごとに自分らで曲を創り上げてます。

――子どもたちを教えていて感じていること

○子どもらを教えるのは楽しいんで、仕事が終わったらすぐ駆けつけます。練習は5時半に始まるんで、そっこうで来るっていう感じ。

○学校が終わったら来てる。習い事のある日は来られへんけど、太鼓をしたいから学校のクラブには入ってへん。

○子どもらを教えるんは楽しいです。うまくなるんをみるんがとても楽しみです。しんどいなあと思うのは、教えたことをなかなか覚えてくれへんときです。

――活動していて困っていることは？

○太鼓の数が少ない。はじめの頃はもっと少なくてタイヤをたたいて練習したりしてました。でも、ボヨンボヨンでぜんぜんあかん。最近は、だんだん新しい太鼓が増えているんで、もうタイヤをたたくことはないけど、でもまだまだ、ぜんぜん足らへん。

○海外へ遠征したいけど、費用が足りなくて困

ってます。

——目標としているグループは？

○やっぱ、いかり（浪速の「太鼓集団・怒」）。大阪のなかやったら一番すごいと思う。まえに出稽古にいったこともある。身近な目標や。

○ざんぱ（沖縄の「残波大獅子太鼓（ざんぱうふじしたいこ）」）や。太鼓だけやなくて、ふり、もすごい。

○今、ざんぱに行ってる子がもどってきたら、新しい風が吹いて、しげきにもなって「鼓吹」もまたぐーんと変わるんやないかと期待してます。（残波大獅子太鼓をやりたくて沖縄の高校に入学した人がいるそうです。すごいっ！）

——これからやっていきたいことは？

○わかもんのグループをつくりたい。子どもらにはまけたない。

○もっとうまくなりたいし、すごいと思われたい。太鼓はめっちゃおもろい。楽しく太鼓ができたらいいと思ってる。

○ずうっと続けていきたい。

○小学生の時にやってても、中学生になって受験やらで離れていく子もいる。でも、その時期を越えて、また「鼓吹」に戻ってきてくれたらええなと思っています。

○おとなはサポーターの役割で活動を支える側にまわり、若い打ち手が自分らで練習の仕方や表現などいろいろ考えてやっていけるようにしていきたいと思ってます。

——太鼓をやっていてよかったこと？

○自分の成長や原点が確かめれる。

○実感はないけど、欲が出てきたことちゃうかな。

○子どもは感性豊かやから太鼓で変わる。これまで不登校やった子が学校へ行くようになったり、しんどい家庭の子の親が子どもや教育に関心をもつようになったりしていくのをみてきて、よかったなあと思うし、太鼓ってすごいなあと思う。ぜひ一度、演奏を聴きに来てほしいと思います。

**「北芝太鼓『鼓吹』」**

1985年、北芝の伝統文化「たいまつ」が、地元青年によって復活、同時に「鉦と太鼓」のリズムも復活。

1989年、沖縄の太鼓グループ「残波大獅子太鼓」との出会い、大きな衝撃をうける。残波のリズムで演奏をするようになる。

1996年、時勝矢一路さんとの出会い、オリジナル曲を書き下ろしてもらう。「北芝解放太鼓保存会」として正式発足し、週2～3回の練習を重ねながら、演奏活動を展開。箕面市民人権フォーラム等、多数の舞台で発表。

1999年、「人権教育のための国連十年」中間年大阪会議を記念して開かれた「鼓色祭響99 inOsaka」にて「太鼓集団・怒」など大阪府内の太鼓グループと競演し、大きく飛躍。

2001年、グループ名を「北芝太鼓『鼓吹』」と改める。現在、会員は40人、小学3年生からおとなまで年齢は幅広い。太鼓を楽しみながらも「厳しさ」「真剣さ」「正確な技術」を身につけるため、日々練習を重ねている。

**「北芝太鼓『鼓吹』」の練習**

月・木曜日は上級コースの練習、火・水曜日は中学生以下の子どもたちの練習、金曜日は、休みだが、公演前になれば練習をする。練習時間は5時半～8時まで

**クリスマスコンサート**

**12月22日**(日)

午後6時開演

（5時半開場）

**らいとぴあ3階ホール**

入場無料（どなたでも参加していただけます）

——読者にメッセージを

○12月22日にクリスマスコンサートをするんで、ぜひ来てほしい。演奏を聴きにきてください。

**話し手**・松本さん、小林さん、丸岡さん、川田さん、丸岡和之さん

今年度初めて「ひがし幼稚園・第六中学校合同運動会」を開催いたしました。これまでも六中の体育祭でひがし幼稚園児たちが演技を披露し、午前中に見学したり、選択授業や家庭科の授業で中学生が幼稚園に行き、紙芝居をしたり、保育の実習をさせていただいたりという交流を行ってきました。今回はさらに発展させて合同開催という形で実施しました。

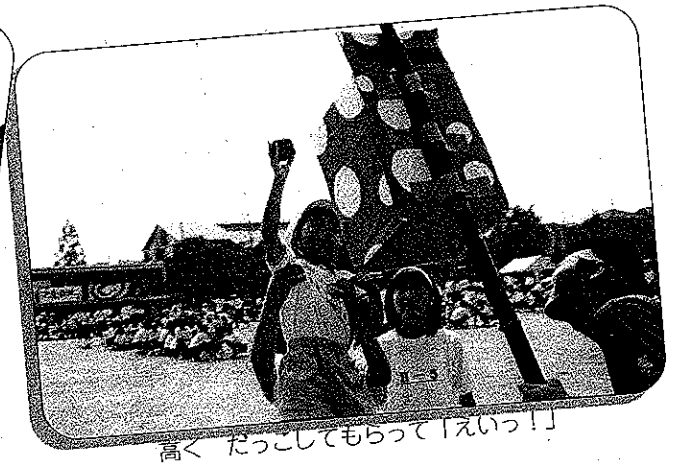
日頃接する機会の少ない中学生と幼稚園児の交流ですが、こうして触れあってみると優しさや笑顔がいっぱいみられました。今後もいっそう地域のつながりが深まればと期待をしております。

さぁ　入場！　手をつないでもらったり、おみこししてもらうのが楽しみ。

♪おさかな大国♪で準備体操。

中学生の人といっしょに選手宣誓。「みんなで　ちからを　あわせて　レッツゴー　ファイト！」

「それっ！」「あと　もうちょっと！　がんばって！」



高く　だっこしてもらって「えいっ！」

「いそげ！　いそげ！　おちないように　しっかり　つかまってて」

もうすっかり　なかよしになって　息もぴったり。ハイ、チーズ！

# なべちゃんのおサルでもわかる『人権教育基本方針』

## 2. 説明責任って、なんだ？

第2章第3節1項 「市民が主役となって人権教育をすすめるためには、市民が人権教育について知る権利を保障することが基本です。関係部局とも連携しながら、人権教育に関する情報の収集と市民への提供を行うとともに、人権教育に関する施策情報の公開をすすめます。」

「アカウンタビリティ」という言葉をみなさん知っていますか。日本語では「説明責任」と訳されていて、最近よく使われるようになりました。例えばある企業が大きな借金を抱えているとすれば、その企業は借金を抱えているという事実や今後の建て直し計画を社員や株主、そして一般に対して説明する責任があります。そうしなければ社員は沈没しかけの船に知らずに乗っているに等しい状態となったり、その企業の商品を買った人も場合によってはひどい損失を被るなどということとなります。こうした重要な事柄についてあらかじめきちんと説明しなければならないという考え方が「説明責任（アカウンタビリティ）」なのです。これは企業や行政だけでなく、学校も同じです。

しかし説明責任というのはなにも学校をはだかにしてつるし上げようというようなむごいものではありません。説明する学校の側にとっても実はとても得することなのです。なぜならば、情報を公開することによって横やりを入れる人が出てくるなどやりにくい一面はありますが、誠実に子どもたちのことを考えてつくられた授業や活動の計画であるならば、最終的には保護者や市民は学校を応援しようとする気持ちがおこり、むしろ積極的に協力してくれる人が出てくるからです。説明責任というのは説明する側の責任だけを言っているのではなく、みんなが協力してよりよい方向へと運ぶための第一歩であるわけです。教職員・保護者・市民がより緊密に連携することにこそ、その本当の意味があると言えます。

人権教育は教員が教室の中だけで出来ることではありません。家庭や地域の協力のもとではじめて豊かな経験を通じた教育が可能です。そのために情報を共有することが必要です。そればかりでなく、学校任せにしない市民が主役となった人権教育こそもっと重要なのです。

最近はインターネットというとても便利な道具が登場しました。広く情報を公開できるという点ばかりでなく、視覚障害者には音声で、聴覚障害者には文字情報で伝えることができ、バリアフリーなコミュニケーションの道具としても優れた側面を持っています。こうした力を借りながら、これまで十分な対話の中に参加出来なかった人々、しかも人権という観点からは大切な意見を持っている人々と対話する機会を増やすことができます。

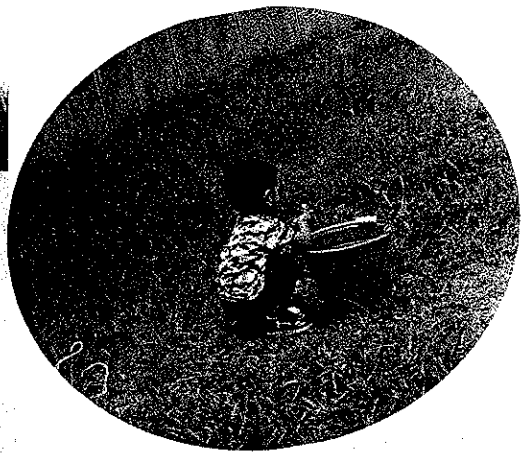
こうした努力を通じて、教えるプロとしての教員と、教えたいという思いを持っている市民とがタッグを組んでよりよい人権教育をつくっていくために、情報を積極的に共有する文化を箕面の地で創ってほしいと願っています。

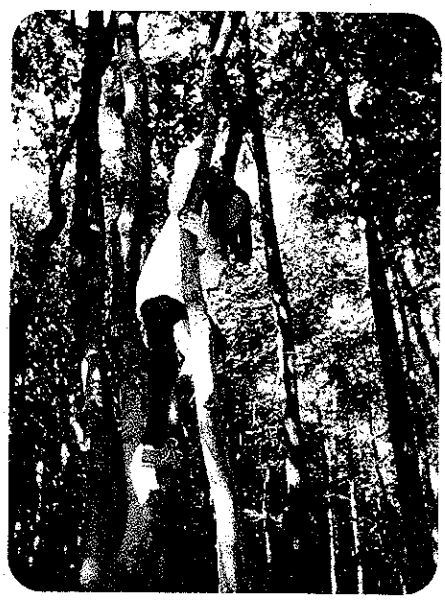
（鍋島祥郎なべしまよしろう 大阪市立大学人権問題研究センター助教授）

人権教育推進会議情報誌『はじける　こころ』
発行　箕面市人権教育推進会議
箕面市教育委員会
教育企画課　TEL072-724-6762 FAX072-724-6010
e-mail:edukikaku@maple.city.minoh.osaka.jp
平成14年（2002年）12月

人権教育推進会議委員
鍋島祥郎、服部ひとみ、埋橋淑子、河野秀忠、丸岡康一、永田よう子、福島全子、松野ひろみ、左英順、屋代直巳、田中はるみ、柳井律子、林宏海、山田佳彦、寺元耕二、上田博、鶴丸春吉、仲野公、藤原秀子、上西利之、井上隆志、前田健、若生耕造、南橋正博、南悦司、津田善寿、黒田正記、前田功、辻広志、浅井晃夫、谷口あや子、太田克己、坂上潔司

# げんげのページ





げんげの：「げんげ（紫雪草）」とは、れんげ草のことで、「げんげの」は、れんげ草が一面に生い茂る野原のことです。れんげ草は、茎が地に臥して広がり、春になると蓮の花に似た小花を一面に咲かせます。また、れんげ草は、緑肥として大地を肥やします。蓮に似た小さなれんげ草を、子ども一人ひとりの尊厳に見立てて、それが一面に花開く様子をイメージしました。

写真募集！
子どもたちの笑顔、真剣な顔、輝く顔…などの写真をお送りください。